
顕彰碑が語る東京湾海苔 漁業の盛衰

井上 潔

佐賀県在住の川村嘉応会員から、大森漁業組合跡地と大森地域の諏訪神社、貴船神社及び江戸川区北葛西にある西宇喜田稲荷神社の4箇所に関東圏の海苔に関する顕彰碑があることを紹介いただいた。今般、これらの4箇所の顕彰碑を訪ね、東京湾の海苔養殖業の盛衰について碑文を通して振り返ってみたいと考えた次第である。

東京湾に於ける浅草海苔生産は、1682年大森の住人野口六郎左エ門らが時の幕府に願い出たのがその始まりとされる。特に、東京湾南部に位置する大森地域は適度の潮の干満と遠浅で波静かな海面に加え、栄養分を多量に含んだ河川の河口に近いという海苔養殖の環境に恵まれた地域であった。江戸時代の宝永期(1673-1680)の頃に品川、大森方面で始まったヒビ(当初は粗朶木を使用)を用いた海苔の養殖が、享保期(1716-1736)に入って技術として確立して品川・大森の沿岸の浅瀬で普及し、一大養殖海苔の産地として成長していった。江戸川柳に言う「大森が海苔のなる木を植えておき」である。

江戸時代中期以降になると、大森地域は「浅草海苔」の中心的産地として「大森本場乾海苔のブランド?」を確立し、江戸後期以降全国各地で勃興した海苔養殖業界の指導的役割を果たした。以降、昭和の中頃に至るまでの三百年間わが国第一の養殖海苔産地としての地位を占めてきた。しかし、昭和30年代にはいり、漁場環境が次第に悪化するなか、首都圏建設の一環として内湾漁場を埋め立て、高速道路を建設する計画が浮上し、昭和37年12月東京港の改修と引き替えに、300年に亘る海苔養殖業に幕を下すに至った。

ところで、浅草海苔の名前の由来には次の諸説がある。①古く入り江となっていた浅草沿岸で、この海苔が採取された。②品川・大森で採取した海苔を浅草で製造・販売した。③品川・大森で採取し、製造した海苔を浅草で販売した。④乾し板状の浅草海苔の製法と形状が、再生紙の浅草紙の製法・形状に良く似ていた。後に「アサクサノリ」の和名をつけた岡村金太郎博士は①の説を採っている。しかしながら、藤森(1971)は東京湾奥部の地形と往昔の海岸線について考証し、江戸湾で海苔が採れたとされる室町時代(長祿期:1457~1460)には浅草はもはや海ではなく、その時代に浅草沿岸で海苔が採取されたとは考えられないとしている。従って、名前の由来としては②或いは③とするのが妥当ではないだろうか。

1. 漁業記念碑

東京湾に於ける海苔漁業の変遷を記した碑が、大森漁業協同組合跡地(大田区大森東3-5-15)に建つ漁業記念碑(写真1)である。現在、大森漁協跡地は大森児童館となり、碑の周辺は子供たちの遊び場となっている。碑は都内最大の海苔漁業協同組合であった大森漁協の解散に際し、昭和42年12月に建立されている。碑文(抜粋)は以下の通りである。

『所謂“浅草海苔”の由来は諸説に分かれているが、一六八二年大森の住人野口六郎左エ門らが時の幕府に願ひ出て海苔の生産を始めて早くも徳川中世から“浅草海苔”の中心的産地として全国に君臨し、特にその品質は恵まれた立地条件と自然の厳しさを克服するためのたゆまざる漁民の努力によって、大森本場乾海苔の名声をほしいまゝにし、その後全国津々浦々に勃興した



写真1 漁業記念碑

海苔養殖業の先駆者として業界の指導的役割を果たしてきた

.....(中略).....

ともあれ三百年に亘る永い漁業史は大森漁業協同組合を縦糸とし素朴な漁民生活を横糸として織りなされたものである。そしてこれからも永久にこの輝かしい史実は編まれてゆく筈のものであったが、一九六四年、はからずも東京内湾埋立事業により国及び東京都の発展に寄与するため、不本意乍ら自らの漁業権を全面放棄することにより大森漁業史は終焉することになった。それは又祖先が築き上げてきた貴重な技術と独特な精神風土の終焉でもあるのであろうか。誠に愛惜の情にしのみならず、ここに大森漁業協同組合事務所跡に一碑を刻む。

一九六七年吉日』

2. 漁業納畢の碑

写真はそれぞれ、大森諏訪神社(大田区大森西2-23-6)(写真2)及び大森貴船神社(大田区大森東3-9-19)(写真3)にある漁業納畢の碑である。これらの碑はそれぞれの地域の漁場を放棄するに際し、昭和39年に漁業者一同によって建立されたもので、碑文は類似している。以下に諏訪神社の碑文を示す。

『大森における漁業の歴史は千年に及ぶと傳承せられ徳川時代に入って天和、貞享の頃海苔製造業が始められ、正徳五年海苔場が確定し本格的な海苔製造の華が開いた。明治初年有



写真2 漁業納畢の碑(大森諏訪神社)



写真3 漁業納畢の碑（大森貴船神社）

栖川宮大総督御用金仰付に対し全大森漁民と共に金五千両を献上し、新たに海苔場式万参千五百坪を免許され海苔製造業はいよいよ盛んとなり本場海苔として日本国中に大森の名を高らしめた。今回内湾漁場を埋立て、高速道路第一号線建設の議起り、当局との間に幾多の交渉を経て昭和三十七年十二月三日漁場全面放棄の歴史的調印を終わった。茲に 漁業由来の略史を叙し 私達の傳統を後世に傳えと共に子孫の上に神明の加護あらん事を念願して縁も深き諏訪神社の聖地に記念碑を建立する。 昭和三十九年八月吉日』

3. 乾海苔創業記念碑

西宇喜田神社の記念碑の建立は明治36年であり、他の三つの碑に比べ古い。しかし、碑文によるとその技術の定着は最も新しく明治に入ってからである。

海苔養殖が始まった当初、海苔の養殖を行うことが出来たのは、品川宿や大森村、糍谷村等の江戸幕府の許可を得た江戸湾南部地域に限られていた。しかし江戸後期（文政期）から明治に入ってから海苔養殖は江戸川河口、上総国（千葉県富津市、君津市）へと拡大していった。その経緯を物語る顕彰碑の一つが江戸川区の西宇喜田稲荷神社（江戸川区北葛西4-24-16）に残されている乾海苔創業記念碑（写真4）である。

記念碑は明治36年3月に西宇喜田地区の村民有志により建立され、碑文には海苔生産技術移



写真4 乾海苔創業記念碑

転の経緯が刻まれている。以下の碑文は漢文で刻まれており、その内容の解説はとうてい筆者の能力の及ぶところではなく、漢籍に明るい中村保昭会員に以下に示す翻訳をお願いした次第である。

乾海苔操業記念碑（意識）

象額 正三位勲三等男爵「千家尊福^(注1)」

武蔵の海を東京湾と呼ぶ。水は清く、波は穏やか、魚介類・海藻類ともに豊饒の湾で万物の源流でもある。特に海苔の名声は世に知れ渡り、質・味ともに東海一の折り紙付きである。しかし、製造・販売は従来から荏原郡^(注2)の大森村のみに限られていた。明治十四・五年になると、本事業への参入希望者が次から次へと現れ、遂には南葛飾郡沿岸村落の有志が、事業を創設することになった。「西宇喜田村^(注3)」もその一つである。

当時里正^(注4)の「故宇多川政休」は、「田中小五郎」を本事業の創設に向けて、総代に推し有志に諮った。両氏は全身全霊の下、目的を達成した。例えば、「西宇喜田」は漁業上他に負債を抱えていたが、両氏はこの中に分け入り、苦難の末、己等の名誉毀損を顧みることなく、自らの職務に万難を排して邁進した。

他の総代は考えを整理し協議を重ねた結果、海苔の採取場を東京府庁に初めて申請することを決断、（明治）十九年二月に認可された。皆一同大喜びであった。当時、田中氏は衆人より先にこの業種に参入していたが、創業初期故、未

熟不慣れも重なり、無駄な資金運用も数え切れなかった。

田中氏は怠慢との誹りを恐れ、努力に努力を重ね、時間の経過とともに、事業は徐々に軌道にのり、損失を全額償還するのみならず、所得も大きく計上するに至った。人々は共に喜び、事業参加希望者が日益しに増え、倍に膨らんだ。この結果、事業場の狭さが懸念材料となってきた。(明治)二十四年八月各総代と共に中川沖十万歩の地を新たに申請し、認可を得た。

発展は目覚ましく速く、「西宇喜田」の一統のみでも操業者は百人余りに達したほどであった。如何に繁盛したか、これほどの隆盛を見たのは、無論衆人の和の賜物に加えて、二氏の努力抜きにして公益を生み出すことは、成しとげられぬことであった。

ここに東海の名産たる名を冠し、二氏の功績に報いる。時に「西宇喜田」の有志は、二氏の功績を百世に伝えるべく、鎮守社の傍に石碑を立てることを発案。余^(注5)は非才不敏を持ってしても終始その意を賛美し、その事情に詳しい者としてこの功績を顧慮し、記録に留めておかなばならない。

古人曰く、二人が同心であれば金すら切れる^(注6)。人は志を立て、計画・実行しさえすれば何ら憂いなし。二氏の偉業を範とすべきである。

明治三十又六年歳在癸卯三月

前衆議院議員橋本省吾撰 拜書

(注釈)

注1:「千家尊福」(1845年9月7日～1918年1月3日:72歳没)、日本の宗教家、政治家。位階は従二位。勲等は勲一等。爵位は男爵。出雲大社宮司、神道大社教管長、元老院議官、貴族院議員、埼玉県知事、静岡県知事、東京府知事、司法大臣、東京鉄道株式会社社長などを歴任。

注2:現在の品川区荏原。

注3:旧西宇喜田村(現・江戸川区宇喜田町・北葛西・西葛西・中葛西周辺)。

注4:村長。

注5:橋本省吾。

注6:二人で力を合わせれば、如何なる困難にも打ち勝ち・乗り越えられ成功に導かれるとの大意(中国成語:同心同徳)。

藤森(1971)によれば、内湾漁業廃止に伴い建立された海苔養殖に関する記念碑は今回紹介した4件の外、船堀日枝神社(江戸川区船堀6-7-23)、真蔵院(江戸川区東葛西4-38-9)、長島香取神社(江戸川区東葛西2-34-20)にも建立されているとのことである。

東京の都市化に伴い、大森地区に限らず、江戸川地域も現在は埋立てられて海苔漁場は完全に消滅している。時代の趨勢とは言え、水産の禄を食んできた筆者にとっては一抹の寂しさを禁じ得ない。

沿革

1733年(享保18年)

『江戸砂子』に、浅草で製造する海苔の産地として「品川大森」との記述がある。

1746年(延享3年)

大森村が海苔業税を江戸幕府に納め始める。

1902年(明治35年)

大森漁業組合ができる。千葉への海苔の移植が始まる。

1950年(昭和25年)

大森漁業協同組合が結成される。

1962年(昭和37年)

海苔漁業が終わる。

1963年(昭和38年)

東京湾の埋め立てが開始される。

1964年(昭和39年)

諏訪神社境内に海苔漁業の終焉を記す「海苔納畢の碑」建立。

1965年(昭和40年)

都内最大の漁協「大森海苔漁業協同組合」が解散。

1967年(昭和42年)

漁協跡地に「漁碑」建立。昭和島埋め立てが終わる。

参考資料

藤森三朗(1971):江戸地先に発祥して全国的に発展したノリ養殖業、東京都内湾漁業興亡史p523～659

藤森三朗(1971):東京都内に現存する水産関係記念碑、東京都内湾漁業興亡史p975～801

大田区立郷土博物館(1993):大田区海苔物語、東京美術